G−14 家庭科教育と生活（第1報）── 子どもの帰校後の生活実態から ──

静岡大教育　吉原榮恵

目的　従来の家庭科教育では、やっもすれば、発展性のない、その場かぎりの実用主義的教材観に陥りがちであった。この問題は、いわゆる生活把握のしかたに、規制されているという認識のもとに、家庭科としての生活の本質的把握のための視点が提起される必要を感じる。さらに教科論の確立を志向するにあたっては、家庭科が、子どもの全面発達を保障するために、教育構造の中でどう位置づくのか、その際、教育と実生活、労働との結合の原則をいかに実現していくのかという視角から接近する仕方がある。以上のような問題意識に迫る第一歩として、今回は、子どもの生活実態の傾向を知り、家庭科と実生活や労働とのかゝわりを考えていく手がかりを得たい。

方法　質問紙法による調査、対象者は小学校5、6年生392名、対象の選出は、静岡市土地利用計画図に基づき、地域の性格が特徴的であると思われる学校を選んだ。

結果　子どもの生活実態の傾向は、通塾に時間をとられ生活時間が、こまぎれになっていること。また、生活手段の商品化とあいまって、一方では遊びや労働の経験が少なく、他方では、商品についての現象的把握が出来ていること。などがあげられる。

家庭科で学ぼうとしている子どもたちは自ら主体的にものごとに働きかけて知識をつかみとり認識を発展させるという状況にはあかれていない。このことをふまえた時家庭科として生活の科学的認識における技能伝達の位置づけ、いわゆる、つくることの教育的意味を明確にする必要がある。このことが教育と労働との結合に関連しているものと考えられる。